

## 薬王菩薩本事譚と日蓮の燃身供養観

岡田真水

### はじめに —パラレル（並行話）研究との出会いとその意義

今を去ること41年、筆者の指導教官原實教授は、ケンブリッジ大学に客員教授として招かれて1年間イギリスに滞在することになった。その頃はメールなどという素早い通信手段などない時代であり、修士課程に進学したばかりの指導生を残して研究室不在となることを気かけられた原教授は、筆者に対し、一角仙人伝説 (R̥ṣyaśṛṅga / Ekaśṛṅga) のパラレル（並行話）研究をしてはどうかと勧め、渡英された（研究課題を与えられるというのは当時としては異例のことであった）。これが筆者と仏教説話研究の出会いとなった。

一角仙人伝説は、インド発祥の物語で、日本へは大智度論などの経典を通じて伝来し、能や歌舞伎『鳴神』の題材にもなった物語である。パラレル（並行話）研究の手本にしたのは、ドイツの碩学 Heinrich LÜDERS によって書かれた2編の論文、Die Sage von R̥ṣyaśṛṅga、および Zur Sage von R̥ṣyaśṛṅga であった。この先学の優れた論文を範として、見よう見まねで説話のパラレル・テキストをさらに渉猟し、50話になんなんとする一角仙人伝説を収集してこれらを比較研究し、3年後、その系統分析と伝播に関する論文をまとめた（岡田、1981）。

この初めての説話研究の際に痛感したのは、仏教説話のパラレル研究の近代科学的方法論がまだ確立していないことであった。集めた一角仙人伝説関連の研究論文は54編を数えたが、それらの論文が挙げるパラレルの中には、久米仙人譚のような別系統の説話も混入していて、説話研究・パラレル研究の方法論はまだ混迷していたのであった。<sup>①</sup>

パラレル研究によって得られるのは、単独の文献ではおぼつかない正確な「読み」、説話の歴史の変遷、その説話を包摂する経典の地理的広がりなどに関する知見である（2.1）。また、パラレル研究は、説話の今日的な解釈や現代に対するメッ

セージを探ることも目指す。結局筆者は独力でその仏教説話の平行研究方法論を編み出して、それに基づく成果を発表し続け、幸いにしてそれは学会の認めるところとなって今日に至っている。

筆者の編み出した仏教説話研究の方法を端的に述べれば、

- (1) できる限り洗いざらい平行文献および先行研究を収集
- (2) 説話の必須モチーフ抽出（後述）
- (3) 平行文献一覧作成
- (4) あらすじによる平行文献比較ではなく、単語レベルでのテキスト比較
- (5) 平行の系統図作成

が主な内容である。平行の数が多ければ、先に述べた説話の歴史の変遷、その説話を包摂する経典の地理的広がりを論じることができるし、逆に平行が極めて少ない場合（稀少話と呼ぶ）は、平行を包摂する経典同士が密接な関係を持っていることを示すことができる。

本稿では、まず現実に起こった焼身について論述し、ついで、法華経薬王菩薩本事品第二十三の一切衆生喜見菩薩の物語について上記のような仏教文献学的な検討を加え、最後に日蓮遺文中のこの説話に対する言及を収集して分析することによって日蓮聖人の物語観・燃身供養観を探ることをめざす。

## 1. 焼身供養の社会的影響

### 1.1 薬王菩薩本事品第二十三の一切衆生喜見菩薩 Sarvasattvapriyadarśana のものがたり

法華経の薬王菩薩本事品第二十三（梵文法華経：22. Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta）は、薬王菩薩の前生物語（本事譚）から始まる。

前世で薬王 Bhaiṣajyarāja は一切衆生喜見 Sarvasattvapriyadarśana という名前の菩薩であった。彼は、法華経及び、その教えを説き明かしてくれた日月淨明徳佛 Candrasūryavimalaprabhāsaśrī を供養するため、香木香油を飲み続け、ついに自らの身体に火を灯した。命終して、次生では浄徳王家に化生したあと、今度はこの仏の舍利を納めた仏塔の前で、臂に火を灯して法供養を

行い。それを見守る菩薩たちは現一切色身三昧を得た。その後一切衆生喜見の失われた臂は真実語によって元に戻り、この菩薩は生まれ変わって薬王となった。

## 1.2 薬王品の物語の社会的影響

法華経薬王品では、このような一切衆生喜見菩薩の法供養の物語が語られた後、「若有發心欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能燃手指乃至足一指供養佛塔（菩提心を起こしたものは、この菩薩のように手足の一指でも燃して仏塔を供養せよ）」（平楽寺版 p.521；大正藏9. 54a12-14）とある。

一方、昔から今に至るまで、中国・ベトナム・韓国などで、実際に燃身・燃指供養が行われた（ている）という記録が存在する。中国に関しては、船山徹氏による、<sup>②</sup> 傅翁教団の酸鼻を極めた捨身供養にはじまる詳細な歴史的研究（船山，2002）があり、ベトナムに関しては望月海慧氏の、周辺国の通時的考察や薬王品に関する旗幟鮮明な言及を含む論文（望月，2009）がある。また、三友量順氏の1996年の論文には、現代の韓国で行われた尼僧たちの燃指供養が報じられていて、<sup>③</sup> 三論文それぞれ非常に貴重で示唆に富んだものである。

さらに、燃身供養は日本でも行われたらしく、「小僧行基。并弟子等。……合構朋党。焚剥指臂。行基ならびに弟子等……朋党を合せ構えて、指臂を焼き剥ぎ……」（『續日本紀』卷七養老元年（717）四月壬辰条）という表現が見られ、『大日本國法華經驗記』（11世紀 鎮源作）は「日本國最初の焼身」として、薬王菩薩に倣って燃身供養した沙門應照の逸話を上げている（卷上第九「奈智山の應照法師」<sup>④</sup>）。

このように社会的影響が大きかった薬王品であるが、船山論文では、このような捨身は、必ずブツダの過去世の所行としてして語られ、神通力の一つの発現形態であって、我々の実践項目ではない、という鋭い指摘がある（船山，2002，355）。

燃身供養することにたいしては昔から批判があった。義浄はこう述べている：

「比聞少年之輩勇猛發心。意謂。燒身 便登正覺。遂相踵習輕棄其軀。（聞くところでは近頃は血氣盛んな若者が蛮勇を起こし、焼身すれば悟れると思つて次々人の真似をして身体を軽んじて捨てている）」（『南海寄歸内法傳』卷四

三十八焼身不合 大正54. 231b12-13)

また、20世紀にベトナムそのほかで多く見られた抗議の焼身自殺について、望月氏は次のようにきっぱりと述べている：

「その行為〔焼身供養〕が『法華経』に基づくという認識は、行為者自身によるものにせよ、その行為を受容したものによるものにせよ、誤りである」

（望月，2009：41）

法華経に焼身供養が語られているのは事実であるが、それが弾圧に苦しんでいる仏教徒のために自らが犠牲になることでその状況から解放させるというような菩薩行であるとはとかれていないし、焼身供養というような極限的な布施行よりも、法華経を受持、読誦、聴聞する功德の方がはるかに大きい、と望月氏は論じた（同上：40）。蓋し正論である。

## 2 薬王菩薩本事譚の文献学的研究

実際に社会的影響を与えてきた物語である薬王菩薩本事：一切衆生喜見菩薩説話は、これまで干潟龍祥、杉本卓洲によって思想史的意義が論じられた<sup>⑤</sup>ことはあっても、文献学的なパラレル説話研究はされて来なかった。

文献的な研究がされなかった最も大きな理由は、パラレル説話の展開が少ないからであると考えられる。この説話ばかりでなく、法華経中の説話は、いずれもパラレルが極めて少ない。法華経以前の他の本生経類からの引用・借用がないばかりでなく、他の経典に引用されることもほとんどなく、いずれもが稀少説話・特異説話群ともいうべき存在である。

### 2.1 パラレル研究の必要性と必須モチーフ

パラレル研究がないときに注意しなければならないのは、これまで一切衆生喜見菩薩のモチーフ（描写表現の単位、あるいは共通するテーマ）比定が行われていない為に、本話の定義が曖昧で、この物語と他の説話との混同が見られることである。

ここでは、一切衆生喜見菩薩の物語として必須の説話モチーフを挙げて、その

のち、この混同について説明する。

文献学的に比定された、一切衆生喜見菩薩説話の必須モチーフはつぎの2つである。

- 1) 燃指・燃臂・燃身によって自らを燈明となす
  - 2) 仏(塔) 仏法に対する燈明供養であること

説話の必須モチーフを設定せずにパラレル研究をした場合についてみてみよう。一つ目は干潟が、一切衆生喜見菩薩説話と同話とした Kāñcanasāra (虔闍尼娑梨<sup>⑥</sup>) 説話(干潟, 1970, 619)である。これらは次のような理由で、別話であるとみるべきである。

『賢愚經』や今昔物語で知られる Kāñcanasāra (虔闍尼娑梨) 説話の主人公は、身体を剷<sup>えぐ</sup>ってそこに脂燭を入れて燃やし、千の燈明を灯した(大正藏4. 349c11;15)。しかし点灯の目的は、「妙法を求めて」とされ、あくまでも自らの求法のために行われたのであるから、モチーフ2)とは相違する。したがって一切衆生喜見菩薩説話とは別話であると考えべきなのである。

また同じ『賢愚經』二十八品に、「是時薩簿。即以白氎。自纏兩臂。酥油灌之。然用當炬。將諸商人。經於七日」(大正藏4. 393b18-19. 商主が白い布を身に纏い、これに酥油を注ぎ自らの身を炬火として七日間燃やして隊商を導いた)という燃身物語がある。これには他にパラレルがあり、中でも『悲華經』卷九の物語がよく知られている(大正藏3. 227a5ff)。しかし、この臂を焼いた物語は、燃身の目的が、隊商たちの行く手を照らし導いて救出することであるので、やはりモチーフ2)とは相違し、藥王本事話とは別話であると考えべきである。

さらに、1,2でとりあげた、ベトナムの焼身自殺は、抗議のために行われたものであるので、モチーフ2)に相違する。したがって、この焼身自殺を「藥王菩薩本事話に倣って行われた」とは言えないことが明白であり、望月氏の主張を証する根拠となりうるのである。

#### ➤ 必須モチーフの抽出法

ここで必須モチーフをどうやって選定するのかということを書いておく。

ある説話の研究をするとき、最初にどこから手をつけるかといえば、まず「パ

ラレル」：並行話探しである。パラレル研究のメリットとしては、本稿冒頭で触れたごとく、次のことが考えられる。

① 文献学的貢献：正しい読み、よい読みが得られる

パラレルを見ることによって、意味の不明瞭な箇所が理解可能になることが多い。

特に古い漢訳文献などはパラレルなしに読むことが甚だ困難なことがある。

② 経典成立・伝播史・思想史的研究への貢献

パラレルを収集して比較研究することは、そのパラレルを含んでいる経典・文献（親テキストと呼ぶ）間の関係を明らかにすることに貢献する

これらから、説話研究にとってパラレルを洗いざらい探し出すということが不可欠なのである。

必須モチーフ決定の手順は、モチーフ比較をして「必須モチーフ」：当該説話を成り立たしめる為に必須である構成テーマと思われるものを抽出した後、再び「パラレル（並行話）」探しをおこない、再度「必須モチーフ」を検討するという作業を繰り返し、最後に、「必須モチーフ」を決めるというもので、そののちパラレル（並行話）一覧が作成されるということになる。

## 2.2 薬王菩薩本事譚：一切衆生喜見菩薩説話のパラレル一覧

先述のごとく作成された「一切衆生喜見菩薩説話」のパラレル一覧を次に挙げる。<sup>⑦</sup>

① Saddharmapuṇḍarikasūtra XXII. bhaiṣajyarājapūrvayogaparivarto nāma dvāvīṃśatitamaḥ 22

『正法華經』薬王菩薩品第二十一 竺法護286年譯 大正藏9. 125a-127a

『妙法蓮華經』薬王菩薩本事品第二十三 鳩摩羅什406年譯 大正藏9. 53a-55a

『添品妙法蓮華經』薬王菩薩本事品第二十二 闍那崛多他601年譯 9. 187c-9c

② Dvāvīṃśatyavadānakathā (Okada, 1993: 187 1.7-189 1.7) [後期アヴェダーナ]

③ Divyāvadāna Tokyo Uni. No. 170写本 XII. Dīpadānakathā [この東大写本のみにある]

④ 『大智度論』卷第十 龍樹作 鳩摩羅什402-5年譯 大正藏25. 130c6-19<sup>⑧</sup>

- ⑤ 同 卷第十二 同上 大正藏25. 150b16-17<sup>⑨</sup>
- ⑥ 『轉法輪經憂波提舍』世親作 毘目智仙541年譯 大正藏26. 357a13-14<sup>⑩</sup>  
上記以外に、主人公の名前がなかったり、別であったりしても、モチーフが2つとも一致し、パラレルであるものに、次の『大寶積經』中の二會に記されるものがある。
- ⑦ 『大寶積經』密迹金剛力士會第三之一 竺法護280年訳 大正藏11. 44b1-14<sup>⑪</sup>
- ⑧ Rāṣṭrapālapariṣcchā 第12話<sup>⑫</sup>  
同 Tib S.82.13-16<sup>⑬</sup>  
同 漢訳1 『大寶積經』護國菩薩會 闍那崛多585-600年譯 大正藏11. 461c29-a1<sup>⑭</sup>  
同 漢訳2 『護國尊者所問大乘經』 施護980-年譯 大正藏12. 5b26-27<sup>⑮</sup>

このリスト中、竺法護、鳩摩羅什、闍那崛多は①『法華經』の訳者たちで、そのうち鳩摩羅什は④⑤の訳者でもある。

また⑥『轉法輪經憂波提舍』の作者、世親は、法華經の注釈書である『法華經憂波提舍』の作者である。

⑦⑧『大寶積經』は『法華經』と同じく前世物語に pūrvayoga という用語を使うという共通性がある。

このようにパラレルの分布は、法華經周辺の極めて狭い範囲にかぎられていることがわかる。

そのような中で、後期アヴァダーナである② Dvāvimśatyavadānakathā (以下 Dvāv) ③ Divyāvadāna (以下 Divy) に薬王菩薩の前生ものがたりが引用されたことは驚きである。

### 2.3 法華經のものがたりの後代文学への影響—「22アヴァダーナ物語」

「22アヴァダーナ物語」Dvāv 第18章は、法華經のものがたり中、後代の文学に影響を与えた希少な例である。これは、仏教混淆サンスクリットで書かれた後期アヴァダーナ文献の一つである。1882年に発表された Rājendralāla MITRA による簡略な内容紹介 (Mitra 1882: 83-37) によって世に知られるところとなったが、その後も本文献に関する研究は極めて少なく、Léon FEER による Avadānaśataka



（以下 Avś）からの引用の指摘（Feer 1891: xix-xx, xxvii）や Moriz WINTERNITZ の短い言及（1919: 280）、若干の言語学的研究、Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā とのテーマの共通性に関する指摘などがあるくらいであった。それらはすべて、Dvāv のいずれかの写本を元になされた研究である。

筆者は、Bonn 大学教授（当時）故 Michael HAHN 博士の収集した22の写本を校合し、1993年、世界初の批判校訂テキストを出版した。

この24章よりなる布施物語 Dvāv 中の説話の平行研究については、上記 Feer 以外には筆者によるものしかない（1985年に提出した博士学位論文の未公開注釈部分に含まれる）。

➤ Dvāv XVIII Dipadānakathā（第18章燈明供養物語）の内容

第18章の構成は次の通りである。

時代は、過去91劫 Vipāśvin 仏出世時、場所は Bandhumatī。登場人物は、Bandhumatī とは別の都に住んでいる主人公のほか、Vipāśvin 仏、Bandhumat 王、バラモンの家長たち（一部 Avś 第69話の引用あり）である。

[1] 【仏塔右繞供養】

主人公は手足がなく、また白癩病に冒されていた。彼は、Bandhumatī の都で、バラモンたちが Vipāśvin 仏の仏塔を供養していることを聞き、自分も身体力の力のかぎりに仏塔を供養したいと思いついた。夜、苦勞の末に仏塔にたどり着き、地に倒れたまま身体を転がして、仏塔を右繞する。108回右繞した時、手足が備わり、白癩病が消えた。彼は五体倒地して礼拝したあと帰宅して、いぶかる家人に仏塔供養をして起こったことを告げる。

[2] 【報恩の燃身供養の企てと制止】

お礼参りのため彼は捨身供養を誓い、八日、十四日、十五日に齋戒を守って、1年後、Kārttika 月から Aśvin 月の満月まで断食を行い、燃身しようとする。その時、天からそれを止める声が響く

[3] 【挿入話：一切衆生喜見菩薩の燃身供養】

天の声はかつての一切衆生喜見菩薩の仏塔燃身供養を語る。

[4] 【燈明供養】

天の声は世尊であった。燃身供養は成し難いので、燈明の輪を作って捧げる



ように、と世尊に言われ、主人公は1ヶ月の間、仏塔に燈明の輪を燃やし続けて供養した。

[5] 【命終転生】

誓願の力によって Dīpārca 世界に Dīparāja という名の辟支仏として生じ、五神通を得、輪廻を脱却すべく、七多羅樹の高さの虚空に飛び上がり、Tejas 世界に達して、流星のように槃涅した。

[6] 【燈明供養の讚歎詩】

世尊の広説。Subhāṣitaratnakaraṇḍakathā (SRKK) 第95, 96, 98, 99の引用を含む8つの偈で燈明供養を讚歎する。

これらの中で特に注目すべきは、[3] 挿入話である。すなわち、一切衆生喜見菩薩の燃身供養の物語が天からの声（実は世尊）によって語られるくだりは法華經藥王品からの引用なのである。

以下の表1に、XXII. bhaiṣajyarājapūrvayogaparivarto nāma dvāviṃśatitamaḥ 22 法華經藥王菩薩本事品第二十三の本文、Dvāv 第18章（パラレル箇所は■部分）、Divyāvadāna（以下 Divy）の未公開写本 Tokyo Uni. No. 170中の XII. Dīpadānakathā（パラレル箇所は■部分）の一致するところを示す。

このテキスト比較により、元となったテキストは、もっとも内容が豊富である法華經 Saddharmapuṇḍarikasūtra であり、次が Dvāv、それを更に引用したと考えられるのが Divy T170写本であることがわかる。

藥王品の一切衆生喜見菩薩の物語から派生した22アヴァダーナ第18章の物語では、主人公の燃身供養の企てをブツダが制止していることに注目すべきである。

表1. 薬王品・Dvāv 18章・Divy 東大写本12章テキスト比較

法華経薬王品と Dvāvimśatyavadānakathā XVIII Dīpadānakathā（網かけ部）、Divy 東大写本（下線部）

[KN.p.404 l.9] atha khalu bhagavān ... vīditvā tasyām velāyām Nakṣatrarājasamkusumitābhijñam bodhisattvam mahāsattvam etad avocāt / bhūtapūrvam kulaputrāṭīte 'dhvani Gangānadivālikāsamañ kalpair yad' āsīt tena kālena tena samayena Candrasūryavimalaprabhāsaśrīr nāma tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka udapādi vidyācaranasampannaḥ sugato lokavid anuttarah puruṣadamyasārathih śāstā devānām ca manuyānām ca buddho bhagavān /

[l.14] ... [KN.p.405 l.6] tasya bhagavataś Candrasūryavimalaprabhāsaśrīyas tathāgatasyārha[l.7]taḥ samyaksambuddhasya pūjākarmane / sa ca bhagavān imāḥ saddharmapuṇḍarīkam ...

[p.405 l.9] ... tasya khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā bhagavataś Candrasūryavimalaprabhāsaśrīyas tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya dvācatvāriṃśatkalpa[l.11]śahasrāny āyus- pramāṇam abhūt teṣāḥ ca bodhisattvānām mahāsattvānām teṣāḥ ca mahāśrāvakānām tāvad evāyuspramāṇam abhūt /

sa ca ... sa dvādaśānām varṣasahasrānām atyayena sarvarūpasamdarśanam nāma samādhim [p.406]pratilabhate sma / ... sa tasyām velāyām tathārūpam samādhim samāpanno yasya samādheh samanantarasaṃpānnasya

Nakṣatrarājasya bodhisattvasya mahāsattvasyātha tāvad evopapary antarīkṣān māndāravamahāmāndāravānām puspānām mahantam puspavarṣam abhipravṛtam / kālānuśāricandanameghaḥ kṛtā uragaśāracandravarṣam abhipravṛtam / tādrśī ca Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sā gandhajātīr yasyā ekah karṣa imām sahaloka-dhātum mūlyena kṣamati //

atha khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sa sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo mahāsattvaḥ smṛtimān samprajānaḥ tasmāt samādher vyudatiṣṭhad vyutthāya caivam cintayām āsa / na tatha rddhiprāthihāyasamdarśanena bhagavataḥ pūjā kṛtā bhavati yathātmabhāvaparitāyāgeneti / atha khalu punar nakṣatrarā[p.407]ja- samkusumitābhijñā sa sarvasattvapriyadarśano bodhisattvo mahāsattvas tasyām velāyām agaruturuṣkandurukarasam bhakṣayati sma campakatailam ca pibati sma / tena khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā paryāyena tasya Sarvasattvapriyadarśanasya bodhisattvasya mahāsattvasya satatasamitam gandham bhakṣayataś campakatailam ca pibato dvādaśavarṣāny atikrāntāny abhūvan /

atha khalu Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sa sarvasattvapriya- darśano bodhisattvo mahāsattvas teṣāḥ dvādaśānām varṣānām atyayena tam svam ātmabhāvam divyair vastrair pariveṣṭya gandhatailaplutam kṛtvā svakam adhiṣṭhānam akarot svakam adhiṣṭhānam kṛtvā svam kāyam prajvalāyām āsa tathāgatasya pūjā- karmane' sya ca saddharmapuṇḍarīkasya dharmapariyāyasya pūjārtham /

atha khalu Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā tasya Sarvasattvapriyadarśanasya bodhisattvasya mahāsattvasya tābhīḥ kāyapradīpa- prabhāḥvālābhīr aṣṭigaṅgānadivālikāsamā lokadhātavaḥ sphuṭā abhūvan / tāsu ca loka-dhātūṣv aṣṭigaṅgānadivālikāsamā eva buddhā bhagavantas te sarve sādhukāram dadanti sma / sādhū sādhū kulaputra sādhū khalu punas tvam kulaputrāyam [p.408] sa bhūto bodhisattvānām mahāsattvānām vīryārambha iyam sā bhūtā tathāgatapūjā dharmapūjā / na tathā puspadhūpagandhamālyā- vilepanacūmāciv aracchatradhvajapatākāpūjā nāpy āmīṣapūjā nāpy uragaśāracandanapūjā / idam tat kulaputra- graṇadānam na tathā rāyaparitāyagadānam na priyaputrabhāryāparitāyagadānam / iyam punaḥ kulaputra vīśiṣṭāgrā varā pravarā prāṇitā dharmapūjā yo 'yam ātmabhāvaparitāyagah /

atha khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā te buddhā bhagavanta imām vācam bhāsitvā tūṣṇīm abhūvan //

tasya khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sarvasattvapriyadarśanātmabhāvasya dīpyato dvādaśa varṣasatāny atikrāntāny abhūvan na ca praśamaḥ gacchati sma / sa paścād dvādaśānām varṣasatānām atyayāt praśānto 'bhūt /

sa khalu punar Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā sarvasattvapriya- darśano bodhisattvo mahāsattva evamrūpam tathāgatapūjām ca dharmapūjām ca kṛtvā tataś cayuṭas tasyaiva bhagavataś Candrasūryavimalaprabhāsaśrīyas tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya pravacane rājño vimaladattasya grha upapanna aupapādika utsaṅge paryāṅkena prādurbhūto 'bhūt /

... [p.409]saptatālamātram vaihāyasam abhyudgamya ...

### 3. 日蓮聖人の薬王菩薩本事譚に対する見解

#### 3.1 日蓮聖人の一切衆生喜見菩薩物語への言及

日蓮聖人は薬王品の一切衆生喜見菩薩の物語にどのような見解をもっていたのだろうか。これを調べるために、現代では、例えば「電子聖典 御遺文 WEB 版」で「一切衆生喜見菩薩」を検索すれば、たちどころに御遺文中のこの物語に対する日蓮聖人の言及のリストを得ることができる—と言いたいところだが、実はそう簡単にはいかない。現存日蓮遺文には「一切衆生喜見菩薩」という語句は全く出て来ないのである。

「喜見菩薩」は、昭和定本に2つ、春秋社刊の遺文全集にさらに1つある。視点を変えて「薬王」を探してみると、なんと【定本】85件【全集】68件出てくる。しかしもちろんその全てが薬王菩薩本事の物語に関するものではないので、内容を検討すると、真蹟遺文とそれに準ずるものが15篇あることがわかった。

さらに「臂」「身／薪」なども調べた上、薬王本事譚言及リストを作成した。

#### 3.2 日蓮聖人の喜見菩薩の法供養（燃身燈明供養）への評価

薬王本事譚言及リストを見てすぐに気がつくのは、その半数以上が1275年に書かれていることである。その前年1274年は、二月に日蓮聖人が佐渡流罪を赦免されて、四月平頼綱の質問に対し蒙古は年内に来襲すると告げ、五月身延御入山、秋、聖人の言のごとく蒙古が攻めてきた（文永の役 十月五日1274. 11. 11）という年であった。

リスト中 No.156『**顯立正意抄**』は文永十一年十二月十五日の日付であるが、実は現在の暦では1275年1月13日にあたる。それで、この『**顯立正意抄**』から No.181『**撰時抄**』までの8篇が、1275年に身延で書かれた御遺文であるということになる。

しかも、この8篇中の5篇は、末法を生きる我々が実践する行ではない、と述べられている。表2の左端欄に●がついている遺文が、燃身供養を推奨していないものである。

肉体を傷つける捨身行を信徒に奨励しない、という日蓮聖人の考えは、すでにその3年前、佐渡で書かれた107『**日妙聖人御書**』（樂法梵志書）に明白に示され

ていた。

「正法を修して佛になる行は時によるべし。日本國に紙なくは皮をはぐべし。日本國に法華經なくて、知れる鬼神一人出來せば<sup>646</sup>身をなぐべし。日本國に油なくば臂をもともすべし。あつき紙國に充滿せり。皮をはいでなにかせん。」定645-646

（正しい佛法を修めて佛になる行法は、時に応じてなされなければなりません。日本國に紙がなかったならば皮をはぐのがよいでしょう。日本國中が法華經に無知で、ただ一人それを知っているという鬼神が出現したならば身を投げ与えるのも当然でしょう。日本國に油がないというのなら臂を燃やさなければならぬでしょう。ところが、日本には厚い立派な紙がたくさんあります。そのような状態のところ皮をはいでも何の意味もありません。同じように、身を投げることも、臂を燃やすことも今の日本では無意味なことです。）

表2. 遺文における薬王本事譚言及リスト

	No	遺文名	引用趣旨	著述年	対告衆
○	073	金吾殿御返事	死んで野に捨てる身を法華經のために投げ出すロールモデルとして	1270	四条金吾
●	107	日妙聖人御書	時に適った佛道修行ではないとして退けられる	1272	日妙聖人
△	156	顯立正意抄	不信心の償いとして行うことの一つ	1275	門下一同
○	163	可延定業御書	志 [= 誠意] を示すことの譬え	1275	富木尼
○	168	神國王御書	法華經流布の覚悟を神々が示したときの譬え	1275	
●	175	法蓮鈔	時に適っていなければ実践しても佛になれない	1275	法蓮曾谷
●	176	種種御振舞御書	正法に身命を捧げる様々な行いの一つ 時に適うべき	1275	
●	178	一谷入道御書	時による法華經供養の過去の行の例	1275	一谷入道 女房
●	180	妙一尼御前御消息	法華經に殉死した聖人としての喜見菩薩（凡夫は燃え尽きる）	1275	妙一尼
●	181	撰時抄	初心の存念（若いときの考え）で「我不愛身命」だと思っていたこととして	1275	
○	207	松野殿御消息	責め苦にあっても踏ん張ろうとはげます法華經の先人	1276	松野六郎 左衛門

●	230	事理供養御書	いにしへの聖人賢者の事供養の例 凡人は観心の法門理供養〔布施〕を	1276	富士檀徒？
○	246	上野殿御返事	法華經のために身命を賭して成仏した例として	1277	南條時光
●	293	日女御前御返事	末法である現在女人が行った聖人への供養の功德に匹敵する昔の法華經供養	1278	日女御前
●	432	身延山御書	昔法を求め捨身したものの一人として 今はその要なし	1282	

181『撰時抄』では、このように記されている：

「予が初心の時の存念は、……「我不愛身命」にあたれるか。……雪山童子の半偈のために身を投げ、薬王菩薩の七万二千歳が間臂をやきし事か、なんどをもひしほどに、經文のごときんばこれらにはあらず。」定1059

(自分の若いころの考えでは、伝教・弘法・慈覚・智証などの先師が、天皇から勅宣を受けて中国へ求法したことが「我不愛身命」ということかと思われた。あるいは玄奘三蔵が中国からインドへ行くのに、六度も命がけの目にあったことかとも思われた。さらに雪山童子が半偈の教えを聞くために身を鬼神に与えたことか、薬王菩薩が日月淨明德仏に供養するため七万二千歳のあいだ臂を焼いたことか、などとも思ったのである。しかし法華經・涅槃經の文の真意は、これらのことをいうのではないようである。)

そのあと經文の「我不愛身命」というのは、身命を惜しまぬ覚悟で三類の怨敵に立ち向かい、謗法を呵責し、法華經は一切經の頂きにあり(「最在其上」と述べることである、と確言された(定1060)。

日蓮聖人自身は、薬王本事話に励まされ、退転しないと踏ん張り(207『松野殿御消息』)誠意を尽くす行いであると評価し(163『可延定業御書』)、法華經のために身命を賭して成仏した例として重んじられたが(246『上野殿御返事』)、末代凡夫の我々にはお奨めにはならなかった(230『事理供養御書』)。

4.2で述べた実際に行われた焼身・燃指供養について考える時、この日蓮聖人のお考えは貴重であると思われる。

ともすれば、壮絶な受難の物語や捨身行説話を目にする時、怯んでしまうか本気にしないかになってしまいがちな一般人も、「説話そのままを真似をするのがよ

いのではない」と言われて胸をなでおろし、「あなたは、あのすぐれた先人達の行いにも匹敵する尊いことをなさっているのです」と言われて大いに力づけられるのである。

これは経典を読むわれわれの心構えを教えられているようにも取れる。そのまま鵜呑みにしてしまうのではなく、しかし、全て架空の物語とするのでもなく、経典を心から信じながら、自らの求法の行いのあり方を確立していくことの大切さを、日蓮聖人は示しておられるのである。

### 参考文献

#### 0. はじめに

LÜDERS Heinrich, 1897, Die Sage von R̥ṣyaśṛṅga, *Nachrichten von der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*. 87-135

— 1901, Zur Sage von R̥ṣyaśṛṅga, *ibid.* 28-56.

#### 1. 葉王本事話の社会的影響

船山 徹2002「捨身の思想——六朝仏教史の一断面」『東方学報』京都, 41-88

望月海慧2009「焼身供養は正しい佛教的行為なのか」『日蓮仏教研究』第三号 常円寺日蓮仏教研究所, 29-48

三友量順1996「葉王菩薩と「燃身」」『勝呂信静博士古稀記念論文集』山喜房仏書林, 406

重松明久1986『八幡宇佐宮御託宣集』「日本國御遊化の部 焼身峯の事」, 現代思潮社

岡田真美子1990「Dvāvimśatyavadānakathā 中の未比定説話」『印度学仏教学研究』39(1)

杉本卓洲1993「法華經にみえる本生談と菩薩の捨身」『菩薩 ジャータカからの探求』〈サーラ叢書29〉平楽寺書店

干潟龍祥 [1970]「本生経類と法華経の関係」『法華経の成立と展開』（金倉圓照編）平楽寺書店

#### 2. 葉王菩薩本事話の文献学的研究

MITRA, Rājendralāla. 1882. *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*, Calcutta. Repr. 1971: 83-87

FEER, Léon tr. (1891), *Avadāna-Çataka, Cent Légendes Bouddhiques*, Annales du Musée Guimet, Paris, XVIII, (Repr.: APA-Oriental Press, Amsterdam, Péimpression 1979.)

WINTERNITZ, Moriz. 1919. *A History of Indian Literature: Buddhist literature and Jaina literature* (tr. by Sylvain Levi, Huber (English Edition)); 280

SUZUKI, Takayasu. 2014. "The Compilers of the bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta." 『印度学仏教学研究』62(3) : 1185-1193

OKADA, Mamiko, 1993, *Dvāvimśatyavadānakathā, ein mittelalterlicher buddhistischer Text zur Spendenfrömmigkeit : nach zweiundzwanzig nepalesischen Handschriften*, Incica et Tibetica Verlag, Bonn.

岡田 真美子（真水）2015「《一切衆生喜見菩薩説話》のパラレル研究——Dvāvimśatyavadānakathā 18章 燈明供養話と『法華経』葉王品」『印度学仏教学研究』64(1) : 320-313

同 2019「仏教説話研究方法論とその実践」（1月日蓮宗勸学院提出の学階請求論文）.



## 注

- ① 1970年代の仏教説話研究に関する事情については、学階請求論文（2019年1月17日蓮宗勸学院提出）の第1-2章で詳述した。
- ② 傅翕（497-569）梁代から陳代初期の在俗の仏教者。梁の武帝（蕭衍）の信任を得た。輪蔵の考案者であることや528年に無遮大会を設けて飢饉の人々を救ったことなどが知られているが、船山論文では激烈なカルト教団の姿が紹介されている。陳・徐陵撰「東陽雙林寺傅大士碑」（全陳文卷十一）、庸・樓穎撰『善慧大士録』八卷（秩）を樓焯が四卷に再編集した『善慧大士録』四卷（續蔵第一輯第二編第二十五套第一冊、續金華叢書）。
- ③ 三友論文の注(16)と(17)は逆に番号がふられている
- ④ 岡田文弘氏の教示による。他にも八幡信仰に関連して「過去の薬王菩薩は自身の爲に身を焼く行を立て、今の人間菩薩（＝仏道修行する八幡神）は、衆生の爲に身を焼く行を立つるなり」（重松、1986：126；137）という記述があり興味深い。[但し、託宣]が薬王菩薩が前世、身を焼いたのを「自身のため」としているのは正しくない。cf. 本論2.1「必須モチーフ」]
- ⑤ 干潟、1970：618-623；杉本卓洲：1993, 213-225は、干潟論文を遥かに凌ぐ情報量である。最近の薬王品研究としては、SUZUKI：2014, 62-3がある。
- ⑥ 賢愚經では「虔闍尼婆梨」とあるが、skt. *sāra* より婆とした
- ⑦ 『合部金光明経』の「栗車毘國王童子。名曰一切衆生喜見（大正16.361c6-7）」は、主人公の名前が「菩薩」を除いて同じではあるが、別話である。
- ⑧ 復次菩薩常敬重於佛。如人敬重父母。諸菩薩蒙佛說法。得種種三昧種種陀羅尼種種神力。知恩故廣供養。如法華經中藥王菩薩。從佛得一切變現色身三昧。作是思惟我當云何供養佛及法華三昧。即時飛到天上。以三昧力雨七寶華香幡蓋供養於佛。出三昧已意猶不足。於千二百歲。服食衆香飲諸香油。然後以天白疊纏身而燒。自作誓言。使我身光明照八十恒河沙等佛。世界。是八十恒河沙等世界中。諸佛讚言。善哉善哉善男子。以身供養是爲第一勝。以國財妻子供養百千萬倍。不可以譬喩爲比。於千二百歲身然不滅。
- ⑨ 又如衆生喜見菩薩。以身爲燈供養日月光德佛。如是等種種不惜身命供養諸佛。
- ⑩ 又言本作。一切衆生所喜見王童子之身。我十二年食香燒身供養佛法。心不生悔
- ⑪ 作一燈炬如須彌山。供奉如來。照恒河沙諸佛國土。以貢上佛。以細帛 裹覆其身。灌用麻油以爲燈火。自然己身演其光明。照遍三千大千佛土。
- ⑫ *jīnadhātustūpapurato me 'valita āśrayaḥ paramabhaktyā |*  
*pūjā kṛtā daśabalanām āsi nṛpātmaḥ Vimalatejāḥ ||*
- ⑬ *rgyal bu gzi brjid dri ma med gyur tshe //*  
*ña yis rgyal baḥi riñ bsrel mchod rten mdun//*  
*mchog tu gus pas lus la me btañ ste//*  
*stobs bcu mñañ ba rnams la mchod pa byas //*
- ⑭ 亦作王子名淨威 於佛塔前自然身 恭敬供養於十力 無上最勝兩足尊
- ⑮ 於佛塔前燃己身 志心恭敬作供養 又昔曾爲無垢王

（本稿は令和元年後期勸学院講座（2019年9月9日）での講義録を大幅に修正・加筆したものである。論文としてまとめることをお勧め下さった渡邊寶陽先生に感謝の意を表したい）